



津田永忠と百間川

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

岡

山での二日目は好天に恵まれたので、レンタサイクルで百間川を河口まで辿ってみることにした。旭川との分流地点から百間川に沿って東へ進み、途中でぐつと南下して児島湾へと至る約一三キロの行程だ。途中、川沿いにある沖田神社にも立ち寄ることにする。ここには津田永忠の銅像と沖新田開発の際に入柱となったという沖田姫が祀られているのだ。気持ちのいいサイクリングとなるだろうに、同行者はそんなことしちゃおれんと、倉敷美観地区へ行ってしまったので、今日は一人旅となった。ところで、岡山城を地図で見ると、旭川が城を囲むように流れている。これは池田家以前の岡山城主だった宇喜多秀家が、旭川を岡山城の外堀として付け替えた結果だった。そして、曲げられた川は洪水に弱くなり、しばしば城下は氾濫に見舞われた。

手が設けられた地点も放水路のコースも現在と同じだという。このように百間川は、岡山城下を旭川の氾濫から守るための放水路として造られたが、その流末にある児島湾を干拓した沖新田開発に伴い、新田の中央を南下する排水路の役割も担うこととなった。その計画は貞享二（一六八五）年にはじまり、永忠は岡山藩最大の新田となる沖新田の開発に取りかかった。そして百間川は欠陥の改修がなされるとともに、沖新田開発に伴う約六キロの流路延伸、排水路としての機能などが付加されることとなった。まず、手始めの改修工事は貞享三年から四年にかけて行われ、旭川との分流地点の大荒手は二つの荒手に変更された。また、そこから百間川を少々下った現在の中島竹田橋付近には「二の荒手」が造られた。そして、さらに下流に「三の荒手」が築造され、三段構えの荒手によって、洪水の流速を弱めるとともに、流れてきた土砂を荒手と荒手の間に沈殿させることによって、下流部の減災を狙ったものだった。さて、「一の荒手」の一部と「二の荒手」は現存しているの、実際に現地を訪れてみたが、「一の荒手」付近の旭川の堰堤が広範囲に工事中で立入禁止となっており、荒手を確認することはできなかった。

中島竹田橋の直下にある「二の荒手」へ行ってみると、これは既に改築工事が完成していた。それまでの荒手は過去の洪水で一部が破壊されたこともあり、この度の全面改修となったのだ。新しい「二の荒手」は、復元改築ということ、石張りで造られた当時の姿を彷彿とさせている。ちなみに百間川の名称は「二の荒手」の長さが百間（約一八〇メートル）であることに由来するとされる。



百間川の「二の荒手」

[交通] 岡山駅から「二の荒手」までは、自転車で約25分